

“賢治たちのイギリス海岸”と野外教室構想

— 岩手地域の地域環境計画に関する研究(第二報) —

米地文夫*・平塚 明*・由井正敏*・幸丸政明*・豊島正幸*

要 旨 これは賢治作品を地域のナチュラルヒストリーとして読み解く作業と、それを元にした地域環境計画へのアプローチの報告である。いわゆる“イギリス海岸”付近の地域環境計画を考えるにあたり、人文的ないし文化的背景との関連性に注目した。この地域の整備に関しては自然科学あるいは環境の学習の場としての役割を果たすような配慮をなすべきである。適合する保護区としては岩手県立自然公園花巻温泉郷の飛び地のかたがちが妥当であり、この自然公園を生かした「野外教室」をつくることを提案する。

キーワード 宮沢賢治、イギリス海岸、地域環境計画、県立自然公園、野外教室

はじめに

この報告は、筆者らを含む岩手県立大学総合政策学部環境政策講座の共同調査による「北上川中流部“イギリス海岸”付近の生態・景観と地域整備」問題に関する論文(由井ら, 1999)の続報である。いわゆる“イギリス海岸”付近の地域環境計画を考える際に特に注目すべき点として、我々は次の4点に特に注目した。

- 1 調査地域の自然景観とくに河川・植生などの位置付け
- 2 ビオトープの認定とその保護保全
- 3 人文的ないし文化的背景との関連性
- 4 地域整備とくに小面積の自然公園整備や住民参加のありかた

第一報(由井ら, 1999)においては、これらのうち1, 2および4について論じた。その中でこのいわゆる“イギリス海岸”付近の環境保全に対して、この地域の住民が、合意を形成することが必要であることを指摘し、さらに次のように述べた。

この地域の人と自然に対するきわめて包括的

な視点は宮沢賢治のそれであろう。賢治の視点を媒介にすることによって地域住民が共通の環境観に到達することが可能かも知れない。そのためには賢治の作品を地域のナチュラルヒストリーとして読み解く作業も必要と考えられる。

この第二報は残された3について取り上げ、上に述べた賢治作品を地域のナチュラルヒストリーとして読み解く作業とそれを基にした地域環境計画へのアプローチの報告である。したがって、本誌『総合政策』第1巻第3号に掲載した第一報(由井ら, 1999)とあわせ、お読みいただければ幸いである。

I 賢治の用いた地名“イギリス海岸”に関する読み解き

1. 賢治作品における地名“イギリス海岸”使用回数の少なさの問題

宮沢賢治は、彼の作品の中において、実在する地名を用いないで多くの架空地名ないしは異称を使用している。それらの中で最も人々に知られているものは“イーハトヴ”と“イギリス海岸”であろう。この両者はそれぞれ対象とした地域が明

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子

確であると解され、地域計画などにも用いられることがある。しかしながら、この両者には大きな違いがあり、その一つは賢治自身による作品中での使用回数の違いである。

“イーハトヴ”とそのバリエーションである“イーハトーブ”“イーハトーボ”等々は多数の作品の中で用いられ、しかも県、市または町、火山、川、海岸など様々なものに冠せられている(米地, 1996)。

これに対して“イギリス海岸”は次に述べるように、二つの作品に用いられているのみであり、しかもその一つである歌曲「イギリス海岸」には、後述のように題名にあるのみで、歌詞にはその名は登場せず、賢治以外の人による命名の可能性すらあり、明確に賢治が作品に用いたことが明らかであるといえる作品は、随筆風の短編「イギリス海岸」のみである。

その違いは、“イーハトヴ”とその類語が、かなり広い範囲を示し、汎用性があるのに対し、“イギリス海岸”が北上川中流、花巻付近の河岸の狭い範囲の異称であることがもたらしたものであることは明白である。

しかしながら、“イギリス海岸”付近が賢治作品の舞台として、狭い割りには多くの作品に登場することも確かであり、それらを以下に検討してみよう。

いわゆる“イギリス海岸”付近を舞台とした、もしくはモデルとした賢治作品は次の通り(短歌を省く)である。

A: いわゆる“イギリス海岸”地域そのものをあつかった作品

「イギリス海岸」(随筆風の短編)

「イギリス海岸の歌」(歌曲)

「川しろじろとまじはりて」(詩、題は仮に付されたもの)

B: “プリオシン海岸”として描かれた作品

「銀河鉄道の夜」(童話)

C: いわゆる“イギリス海岸”周辺を題材とした作品

「岩手軽便鉄道の一月」(詩)

「流水」(詩、ザエと振り仮名がある)

「洪積世が了って」(詩)

2. “イギリス海岸”の命名者の問題

これまで一般には、“イギリス海岸”の命名者は宮沢賢治であるということが、広く受け入れられていた。さらに“イギリス海岸”を宮沢賢治の造語の代表的なものとする論者は多く、例えば赤田(1993)は「…賢治は科学者としての卓越した見識と詩人の感性から『イギリス海岸』と呼び換え」たとしているが、これは過大評価に過ぎるものであろう。宮沢賢治は科学者としては「プリオシン海岸」と呼び、詩人としては「修羅の渚」を見たというべきであろう。

“イギリス海岸”という、この地名は宮沢賢治にしては陳腐であること、短編「イギリス海岸」の中で「私どもがイギリス海岸とあだ名をつけて」、「私たちにとっては、どうしてもその泥岩層をイギリス海岸と呼びたかったのです」、「私たちのイギリス海岸では」などと記しており、「私のイギリス海岸」とか「私がイギリス海岸と名をつけて」などとはしていないこと、「銀河鉄道の夜」では「プリオシン海岸」というより適切かつ魅力的な名を別に考えていること、などから、「イギリス海岸」は賢治自身の造語ではない、という仮説を筆者の一人米地は提示したことがある(米地, 1997)。賢治からドーヴァーにも同じような白い岩があると聞いた生徒達が、なじみのある地名としてイギリスを冠して「イギリス海岸」と命名したのであろう、と考えたのである。

もう一つ“イギリス海岸”の名が登場するとされてきた作品に賢治が作詞作曲した歌曲「イギリス海岸」がある。しかしながら、この歌曲「イギリス海岸」の歌詞には「イギリス海岸」の語は一つもない。歌の名もおそらくは宮沢賢治の命名ではなく、その没後、この歌曲を紹介した宮沢清六氏の付したものである可能性が高い。管見によれば賢治と生徒たちが“イギリス海岸”でこの歌を歌ったという記録は無い。歌曲「イギリス海岸」

の歌詞も曲も暗く、短編「イギリス海岸」の明るい雰囲気の中で生徒たちとともに歌うものとは思えない。この短編の明と歌曲の暗との大きな隔たりについては、既に小沢俊郎（1961, 1975）が指摘している¹⁾。

3. “仲間うちのあだ名”としての“イギリス海岸”の日常性の問題

賢治は短編「イギリス海岸」のなかで、「私どもがイギリス海岸とあだ名をつけて」と書いていることのもう一つの問題点は「あだ名」という言い方である。

短編「イギリス海岸」のなかには、「私」が黒板に生徒に対し「午後イギリス海岸に於て」云々と標本採集に参加する希望者を募る文を書いたという話を書いている。この短編は賢治作品のなかでも、もっともノンフィクション的とか、ルポルタージュ風ということが指摘されており、賢治と生徒たちの“仲間うち”で日常的に用いられていた「あだ名」であったことが推定できる。また、佐藤（1984）は賢治の教え子沢里武治の話として、賢治が沢里の下宿に来て「沢里君、イギリス海岸へ行こうか」と誘ったということを記しており、これもまた“仲間うちのあだ名”として“イギリス海岸”が使われていたことを示している。

賢治は彼の作品中に、実在の土地に対して、実地名を言い換えた多くの架空地名的な名を与えているが、これらを日常生活で用いたり、生徒や同僚などいわば仲間たちと共有したことは、管見によれば皆無である。例えば盛岡へゆくときにモリーオに行こうと言ったり、北上川に生徒を連れて行って、ここがイーハトヴ河だとは言わないのである。

したがって“イギリス海岸”は極めて例外的な事例である。

賢治作品のなかの架空地名は、彼の心象のなかにもみ存在し、彼の実生活のなかで日常的に用いられることはない。その点において“イギリス海岸”は架空地名ではなく“仲間うちのあだ名”として実在の地名なのである。

4. 賢治作品における“イギリス海岸”の“見立て”としての特異性

“イギリス海岸”には、もう一つの例外的な性格がある。それは、その地名の作り方である。

この種の複合的な地名には固有名詞部分と総称的部分（総称詞）とがある。例えば北上川は固有名詞北上と総称詞の川からなり、花巻市は固有名詞花巻と総称詞の市からなる。

賢治が架空の地名を造る時には、大別して二つの手法がとられている。一つは固有名詞造語型であり、他の一つは総称詞変換型である。固有名詞造語型とは、仙台市をセングード市、三陸海岸をイーハトヴォ海岸とするような、前半の固有名詞部分を賢治独自の発想でもじったり言い換えたりして造った地名である。これに対して、総称詞変換型とは、ベーリング海峡からベーリング市を造り、トランスヒマラヤ山脈からトランスヒマラヤ高原を作るなどという型で、既存の実在する地名の固有名詞部分をそのまま、新たに名付けたい他の属性の地形などの総称詞に冠して造った架空地名である。

ところが“イギリス海岸”はそのいずれにも属さない。イギリスにはもちろん海岸があり、賢治作品を読んでいない人は、“イギリス海岸”と聞けば英国の海岸をただちに想起するのであり、“イギリス海岸”とは賢治たちが架空地名を造ったのではなく、単なる見立てによる“あだ名”を付しただけのことなのである。しかも、見立てでも造語的にする場合には、“日本アルプス”や“〇〇銀座”の類のように、元の地名に、当てはめるべき地の地名を冠するなどすると、新たな固有名詞として用いることができるが、この場合はそれもなく（つまり“北上イギリス海岸”のように呼ばず）、仲間内のみで通用する“あだ名”として“イギリス海岸”と呼んだだけのことだったのである。

5. “名付け”に関しての賢治作品の読み解きから示唆される方向

ここまでの読み解きから示唆されるものは何で

あろうか。

まず、第一にはイギリスという名にこだわるべきではないということである。“イギリス海岸”は賢治自身が名付けたものではない可能性があり、むしろ賢治の話から生徒たちが主になって名付けたと考えられるのである。しかも、それは河岸の岩盤に対して名付けたものであり、川の水面とこの岩盤の範囲についてのみ命名されたものである。したがってイギリスという名を活用するとして、周辺に英国を思わせる建物、植生などを用いて英国風の地域づくりを行う、などという類のことは、賢治の視点からは甚だしく遠いものとなる。

一方、“イギリス海岸”に関して賢治が繰り返す「私たち」とか「私ども」が命名したと述べていることは、これからの地域づくりに留意すべき点である。賢治作品の他の架空地名とは異なり、実在する土地、しかも賢治と生徒たちがそこで活動をする場に命名したものである。したがって、単に賢治が命名した地名だから用いる、ということとは、上述のように賢治その人が個人として考えた名ではない可能性が高いことを加味して、再検討しなければならない。

また、筆者らは“イギリス海岸”の名を地域整備において、このまま用いることには疑問があると考えている。この名が人口に親炙したものとなりつつあることは認めるものの、それは一部の賢治ファンや地元の人々が主であり、この名を単独で用いると、様々な問題が生ずると考えられる。一般人には“海岸”とあることに違和感をもたれるであろうし、とくに海外からの来訪者には“イギリス”の名が冠せられていることに疑念をもたれるおそれがある。特にこの一帯の河岸には現在用いられている地名がないため、あたかも地名として広く認められたもののような印象を与えていることは、地名というものの性格からみて適切ではない。もともと仲間内のみで通用する“あだ名”としての“イギリス海岸”であったのであるから、逆にその性格を鮮明にして、“イギリス海岸”と単独では用いず、“賢治たちのイギリス

海岸”と呼ぶことを提唱したい。“賢治たちのイギリス海岸”はもともと“賢治と生徒たちのイギリス海岸”であったのであるが、これからは“賢治と地域住民たちのイギリス海岸”となって欲しいものである。

II “賢治たちのイギリス海岸”の景観描写の読み解き

1. “賢治たちのイギリス海岸”の地形景観の問題

賢治は地形景観としては、新第三紀の海岸の低地をイメージしたのではなく、現世の地形、すなわち岩盤が露出する河岸を、ドーヴァーの白い崖に見立てたのである。ドーヴァーは高い崖の下に砂浜が広がっており、これと岩盤がベンチ状を呈する北上河岸とを同じとするのは、連想に飛躍があり過ぎる。もちろん北上の新第三紀の地層をドーヴァーの白亜紀の地層と見立てるのには無理がある。

一つ、見逃せない文がある。それは宮沢賢治の同僚だった白藤(1972)が書いている回想の中に「この川の岸は、イギリスのリアス式海岸に似たところがあるので、イギリス海岸と名をつけると宮沢さんがいった」とあることである。したがって、宮沢賢治自身の命名である可能性も捨て切れないのである。

この白藤氏の文のようにイギリスのリアス式海岸に似たところがあるといったかどうかには、疑わしい点もある。それは宮沢賢治の地学的な知識が深ければ、イギリスの峡湾(フィヨルド)に似たといったはずだからである。宮沢賢治は短編「イギリス海岸」の中でも、空や建物に関する描写ではあるが、「スキューデンの峡湾にでも来たやうな気がして」と言っているからである。

このことはまた、これまで一般に言われてきた《「イギリス海岸」はドーヴァーの白い崖から連想したもの》という解釈とは異なる説が成り立ち得ることにもなる。それは、宮沢賢治の見立てたのはドーヴァー海岸ではなく、スコットランドあ

たりの峡湾（フィヨルド）なのではないか、という解釈、もしくはドーヴァーの白い崖とスコットランド辺のフィヨルドとを重ね合わせた連想ではないか、という解釈である。

これまでドーヴァーの崖の白亜紀の地層に見立てたとする論者も多かったが、前述のように宮沢賢治はこの河岸の岩を第三紀層と認識しており、短編「イギリス海岸」の中でも「第三紀の終り頃」と書いている。この短編「イギリス海岸」の中の「イギリスあたりの白堊の海岸を歩いてゐるやうな気がする」とあり、白堊紀ではなく白堊であることに注目したい。賢治の学んだ盛岡中学校も白堊の校舎と呼ばれたように地質年代ではなく単に色をいうだけのことも知れないのである。地質年代よりも、むしろ川にぎざぎざに突き出す岩の形と白い色からの連想と考えるべきかも知れない。ドーヴァーの崖にしてもスコットランド辺のフィヨルドにしても、賢治も生徒たちもまるで小人の国に行ったガリバーのように、岩盤の微地形を英国のより大きな地形になぞらえていたのではあるまいか。

2. 賢治の海岸幻想

賢治の膨大な作品の中では海の出てくる作品は相対的には多くはなく、海岸を砂浜の海岸（砂質海岸）と岩礁の海岸（岩石海岸）とに分けてみると、特に砂浜は少ない。例外の一つは未完の童話「サガレンと八月」であるが、この砂浜で風や波と言葉を交わしながら、貝の標本を採集している農林学校助手の話は、同じく童話「ポラーノの広場」の博物局員がイーハトーヴォの岩石海岸へ行く話の先行形となっている。他の一つの例外は「サガレンと八月」と舞台が同じサハリンのオホーツク海に面した砂浜で亡き妹とし子を想う「オホーツク挽歌」があり、賢治は海のはてに死者の行く場があると考えていたのであろう。

賢治が楽しそうに海岸を書いている、ほとんど唯一の例外というべきものは、童話「ポラーノの広場」で、主人公の博物局員レオーノ・キューストは岬から岬へ、岩礁から岩礁へと行き岩石の標

本集め、洞穴や模範的地形の写真やスケッチをとるという話である。採集の舞台が砂浜の海岸（砂質海岸）から岩礁の海岸（岩石海岸）へと変わったのであり、この変化はいわゆる“イギリス海岸”で化石を発見した体験が織り込まれたためと考えられる。また、この岩盤の水面へギザギザに突出した形になっている岩盤が「岬から岬へ、岩礁から岩礁へ」という連想を生み出した可能性がある。

つまり、短編「イギリス海岸」の明るい面の発展形が童話「ポラーノの広場」のイーハトーヴォ海岸なのではあるまいか。

短編「イギリス海岸」のなかで賢治は、“イギリス海岸”の泥岩層が第三紀鮮新世のころの海岸に堆積した地層であるとする当時の考え方にしたがって、海岸のイメージを描いた。現在では前記のように、“賢治たちのイギリス海岸”の泥岩層は第四紀のより内陸的な環境のもとに堆積したものと推定されているが、第三紀鮮新世のいわゆる竜の口海進のころに北上川沿いの地域に内湾性の海成層が堆積したことは確かで、この“賢治たちのイギリス海岸”に近い北上川支流の夏油川に沿う泥岩層がそれであることが、大石・吉田・金（1998）によって明らかにされている。したがって、“賢治たちのイギリス海岸”の泥岩層は時代が異なるものの、北上川沿いの低地が第三紀鮮新世には海だったのであり、おそらくは花巻付近が海かその近く、すなわち海岸であったことは確かであろう。

なお、北上川に沿う内陸部を海に見立てる発想²⁾の原点は賢治の修学旅行体験にあったかも知れない。盛岡中学生だった賢治はこの旅行で石巻で初めて海を見るが、その際、北上川に沿う狐禅寺（現一関市）から石巻へは船で下っている。この北上川の船の旅はそのまま石巻の海につながっていたのであり、実感として北上川と海とが一体的に賢治の心のなかに位置づいたのかも知れない。

Ⅲ “賢治たちのイギリス海岸”の地史的・歴史的背景

1. “賢治たちのイギリス海岸”の地質と化石

賢治は彼の没後はるかのちに盛んになる第四紀学のようなものに関心があったとみられる。いわゆる“イギリス海岸”の地質は新第三紀～第四紀更新世のものであり、新生代学とでもいうべきものへの関心があったのである。

宮沢賢治がクルミ化石や動物の足跡化石などをこの“賢治たちのイギリス海岸”で発見したのは1922年夏と推定されている。賢治は生徒たちに河で水泳などをさせて、自分は岸の岩の上を歩き回って岩の地質を調べ、化石を探していたのであった。

この化石について賢治から報告を受けていた岩手県師範学校鳥羽源蔵教授の紹介で、東北帝国大学理学部早坂一郎助教授が、1925年11月に現地を訪れ、宮沢賢治の案内で化石産地を調査し、その成果を論文(早坂, 1926)とし、また調査の経緯を回想(早坂, 1970, 1975)している。早坂はクルミ化石を北米に現生するバタクルミと同定し、その包含層を第三紀層鮮新統とした。したがって、宮沢賢治関係書のほとんど全ては、この見解に依って第三紀層鮮新統のバタクルミ化石としている。

賢治自身はこの土地にはプリオシン海岸の名を与えたいと考えており、それを「銀河鉄道の夜」で用いたのであろう。

この早坂一郎助教授が「銀河鉄道の夜」の大学士のモデルであろうことは、早坂氏自身も(早坂1970, 1975)認めている。このいわゆる“イギリス海岸”や“プリオシン海岸”について、地質学者である宮城は多くの著書・論文(例えば宮城, 1975, 1980など)を通して、賢治作品の科学的な性格を評価できる好例として論評し、広く賢治作品の地学的意義を知らせる役割を果たしている。ただし、この大学士たちを、考古学者たちとしている例がある(宮城, 1983)のは解せない。

しかしながら、三木茂はバタクルミの変種として再定義し、オオバタクルミの名を与えた(Miki, 1955)。その後発見された諸例(文献は多数にの

ぼるので省略、最近例としては山野井ら, 1997)によって、このオオバタクルミは第三紀漸新世から第四紀更新世にかけて存在し、約100万年前を上限として絶滅したとみられ、また多産するのは第三紀鮮新～更新世であるという(山野井ら, 1997)。

一方、いわゆる“イギリス海岸”の化石出土層準も、大石ら(大石, 1995)によれば、第四紀の前・中期更新世の地層である可能性が高いという。

したがって、本論文では第三紀～第四紀層などと書くことにするが、現在の知見では第四紀の前・中期更新世のオオバタクルミと記載するのがより妥当であると思われる。

2. 江戸時代の開削による“賢治たちのイギリス海岸”の原形の成立

花巻東方の河道が江戸時代の開削によって形成されたものであることは、すでに佐嶋與四右衛門氏によって叙述(建設省岩手工事事務所, 1977)されていたが、それがいわゆる“イギリス海岸”に当たる部分であることが賢治研究者に知られるようになったのは新しく、明確になったのは1998年11月の宮沢賢治学会セミナーにおける平山健一氏の講演(内容については、宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報18号, 1999に紹介がある)が最初かも知れない。

佐嶋氏は岩手工事事務所『北上川 第六輯』において、1645(正保2)年に開削工事が着手されたが失敗し、1672(寛文12年)に再度工事を行ったが失敗、1678(延宝4)年によようやく完成したという経過を記載している。

その結果、かつては下似内集落南側から四日町東側、さらに一日市東側を回り花巻城北側へ出る大きな曲流が、直線に近い河道に付け替えられ、北上川の東岸に位置していた小舟渡集落は西岸に位置することになった。この小舟渡が現在いうところの“イギリス海岸”に面しているのである。

その結果、どのような地形変化が起こったかを考えてみよう。大きく曲流していた北上川がショートカットされたため、その部分は河床の勾配は急

になるはずであるが、その当初は新しい流路が古い流路と合する地点では落差が生じて早瀬ないしは低い滝がおそらく生じており、これが遷急点と呼ばれるものである。その遷急点は柔らかい泥岩を侵食して河床を掘り下げつつ、急速に上流へ後退していったであろう。こうして後退していった早瀬は上流側に残り、それについて賢治は短編「イギリス海岸」の中に「すこし上流がかなりけわしい瀬になって…」と書いている。また「…そのうちだんだん川にもなれてきて、ずうっと上流の波の荒い瀬のところから海岸のいちばん南のいかだのあるあたりへまでも行きました。」とも記している。

この瀬については「あのおぶない瀬」とも書き、溺れた人もいる、と述べている。それに対して彼が海岸と書いている場所は、遷急点の下流で流れが穏やかで水泳場として利用されていたのである。

洪水のときには、この泥岩を下へ掘り下げた（下方侵食）河道から水が溢れるが、その際、かつての流れ方に従おうとして主に西側を横から削ろうとし（側方侵食）、泥岩よりもさらに柔らかい表層の土砂を流し去った。このため泥岩は平らな面をみせて露出し、海岸の岩棚（プラットフォームとかベンチと呼ばれるもの）によく似た形態になる。

普通は泥岩を刻んだ河道の中を流れているが、洪水のときはその岩棚状のところまで冠水するので、そこにポットホール（甌穴、賢治は壺穴と呼ぶ）ができる。ところが、現在では上流のダムの影響や瀬川のつけ替えなどのため水位が高くなり、常時、この泥岩のベンチが水没しているのである。つまり賢治たちのみた風景は、現在では異常な濁水で水位が下がるということがない限りは見られないのである。

3. もう一つの地名「かしまい」について

この“賢治たちのイギリス海岸”には、すでに地名「かしまい」があった。これは江戸時代の開削後に、“賢治たちのイギリス海岸”下流の里川口町に河岸（河港、南部領では川岸と書くことが

多い）が設けられたが、その前、つまり上流に位置することによる名「河岸前」であり、明治以降、河岸が機能を失って長いため、賢治の時代には訛って用いられていた。賢治の教え子の平来作氏は「イギリス海岸というのは、猿ヶ石川が、北上川に落ち合うところ（中略）この落合付近は昔『かしまい』といわれて、花巻に添う北上沿岸としては、音にきこえた水泳場になっておりました」と語ったという（佐藤、1986）。

なお、開削以前の河岸は曲流部に沿う一日市町にあったが、河道が付け替えられて移転したものである。ここから江戸時代には米が江戸へと送り出されたのである。“イギリス海岸”にみられるような新生代の堆積岩は現在の北上市付近から北の日詰付近まで、北上山地の西縁から北上川に沿う平野部の下へと突き出すように分布している。このため北上川がこれらの堆積岩を切る部分は岩盤が出ており、したがって北上市（黒沢尻）以北は大きな船（ひらた船）は使えず、小繰船を用いていた³⁾。

地名「かしまい」があっても、本来の意味を失い、賢治の時代にはただ水泳場の通称としてのみ用いられていたらしい。したがって水泳場を海水浴場の代わりに用いた賢治たちが、その場を海岸に見立て、さらにイギリスという海外への憧れをこめた地名を冠して“あだ名”としたのである。つまりは若き教師賢治とその生徒たちが臨海学校へ行けぬ悔しさを逆手にとって、通称の「かしまい」は使わず、「俺たちは日本の臨海学校どころかイギリスの海岸で泳いでいる」という冗談を言い交わしていたのである。

地名でもう一つ、問題が残っている。それは「いぎりす」という地名がすでに付近にあったということが古書にみられる、という指摘があることであるが、これについては本稿の内容との関わりが薄いので別に報告（米地、1999）する。

4. 近世から近代にかけての変遷と賢治作品

“賢治たちのイギリス海岸”付近の北上川は、江戸時代までは東西に渡る渡船場や南北に上下す

る舟運のための河岸(河港)などがあったが、高水工法の連続堤などはなく、概して言えば原始河川に近いものであった。“賢治たちのイギリス海岸”付近の新河道開削も、全流域の河道を縮めようとするものではなく、花巻の城と町を洪水から守るための緊急避難的なものであったようで、北上川の中流域においては例外的なものであった。したがって、“賢治たちのイギリス海岸”は人工の河道であるものの、自然界に生ずる蛇行のロープが短絡してしまう、いわゆる環流丘陵を作る現象に近いものであって、現在、多くの人がこの“賢治たちのイギリス海岸”をもととの自然河川と試みてみているのも無理はないといえる。

賢治作品でこの地域を扱ったものには軽便鉄道ないしはそれをモデルとした鉄道が登場することが多く、さらに植生や鳥類などに触れているものも多い。賢治がこの付近を好んで作品に取り上げたのは、川や岩盤などの地形景観のみならず、鉄道やクルミやはんの木などの植生、それに鳥類なども含めた景観を愛したからであろう。

IV 地域環境計画の考え方

1. 宮沢賢治の自然や科学、農業などへの想いに沿う計画

この、“賢治たちのイギリス海岸”付近の地域環境計画にあたっては、宮沢賢治の自然や科学、農業などへの想いに沿うものとするを、その柱とすべきであろう。

宮沢賢治は、その履歴からみても、科学への関心が強かったことはいうまでもない。前述のように彼がいわゆる“イギリス海岸”で発見したクルミの化石は早坂氏によって学界に知られることとなったが、短編「イギリス海岸」には随筆風にその発見について記され、「銀河鉄道の夜」の中には早坂氏をモデルとした大学士の化石発掘調査が幻想的な場面として描かれている。この地域の整備に際しては、自然科学の学習の場としての役割を果たすような配慮をすべきであろう。

一方、宮沢賢治はこの土地に生きる農民の幸せ

を願って、さまざまな活動を行ったことも知られている。その努力が必ずしも十分な成果を上げ得なかったという見方もあるものの、その願いは彼の作品の中にこめられており、読む人々に今なお訴えかけている。この地域の環境計画を、周辺の農村の地域整備にも配慮したものとし、農民の生活や生産の向上との両立を目指すものとしたい。

この地帯の景観を整備する場合、岩盤などの保全はもちろんのこと、植生の保護保全に十分な配慮をすべきであり、人工的なものは極力避け、せいぜい「銀河鉄道の夜」のプリオシン海岸に描かれたような標札とか木製のベンチ程度のものにとどめたいと考えた。野外教室はその程度の設備で十分であり、新たな建物、いわゆるハコモノ、はほとんど必要がないであろう。なぜならば宮沢賢治記念館などの施設が比較的近くに存在するからである。ただし、環境にマッチした自然公園管理事務所兼ビジターセンターの類を作るのであれば賛成である。

2. 自然環境保全のための地域指定の問題

“賢治たちのイギリス海岸”に対して、これまでは建設省が河川管理の立場から、花巻市が主として観光振興の立場から、それぞれ地域整備を検討し、施策の実進を進めている。例えば建設省岩手工事事務所は、1998年の水害で河岸が崩落するなどの被害が生じたため、保全工事として丸太や雑木の枝を用いた伝統的工法による護岸工事を1999年に行っている。従来のコンクリート護岸を採用せず、原風景の回復を図った点を評価したい。

また建設省岩手工事事務所と花巻市は「イギリス海岸周辺水辺空間整備事業」や「花巻市水辺プラザ」構想などを計画立案中である。

ただし、これらの地域整備の方策は、“賢治たちのイギリス海岸”という狭い地域に対するもので、河川管理や観光振興などを主目的とした対症療法的なものにとどまるおそれがあり、これに対して、筆者らは、さらに広域的な、かつ医学に譬えれば予防医学的、全身療法的なものとして、自然保護区的な枠組みに組み込むべきであると考え

表1. 自然環境保全地域及び自然公園制度の概要

保護区	根拠法	保護対象・指定要件	指定手続き	区域・計画の変更	個所数	総面積(ha)	
自然環境保全地域等	原生自然環境保全地域	自然環境保全法S47制定 目的：自然環境を保全することが特に必要な区域等の自然環境の保全の総合的促進	人間活動の営業を受けず原生の状態を維持している自然環境 ≥1000ha(島≥300ha)	関係都道府県知事・審議会に意見聴く／土地所有者の同意得る／官報告示	変更は可能 (変更実績なし)	5	5,631
	自然環境保全地域	高山・亜高山植生≥1000ha／すぐれた天然林≥100ha／特異な地形・地質／その他すぐれた自然環境≥10ha(自然公園外)	関係都道府県知事・審議会に意見聴く／公示縦覧／意見あれば公聴会	同上	10	21,593	
	都道府県自然環境保全地域	自然環境保全地域に準じる土地(自然公園外)	都道府県条例による	変更は可能 (少数の区域縮小・拡張例あり)	519	73,609	
自然公園	国立公園	自然公園法S32制定 ^(注1) 目的：すぐれた自然の風景地を保護するとともに、利用の増進を図り、国民の保健、休養、強化に資する	我が国の風景を代表する傑出した自然風景地	審議会に意見聴く／関係行政機関に協議(同意得る)／官報告示	自然・社会条件の変化に対応して「再検討」 ^(注2) 後5年ごとに「点検」 ^(注3)	28	2,047,265
	国定公園	国立公園に準ずるすぐれた自然の風景地	関係都道府県の申し出／審議会に意見聴く／関係行政機関に協議(同意得る)／官報告示	同上	55	1,343,231	
	都道府県立自然公園	すぐれた自然の風景地	都道府県条例による	同上	304	1,945,165	

(注1) 前身の国立公園法はS6年制定
 (注2) 公園区域・公園計画の抜本的な変更
 (注3) 公園区域・公園計画の小規模な変更

表2. 保全地域及び自然公園の区分別自然環境保全機能比較

影響行為	保護区地種区分	原生自然環境保全地域	自然環境保全地域(都道府県自環地域含)				国立公園・国定公園				都道府県立自然公園		
			立ち入り制限地区	特別地区	野生動物保護地区	海中特別地区	普通地区	特別地域	特別保護地区	海中公園地区	普通地域	特別地域	普通地域
生息地の物理的破壊改変	工作物新改増築	●	●	○	○	○	×	○	◎	◎	×	○	
	土地形状変更	●	●	○	○	○	×	○	◎	◎	×	○	
	鉱物掘採土石採取	●	●	○	○	○	×	○	◎	◎	×	○	
	水面埋立干拓	●	●	○	○	○	×	○	◎	◎	×	○	
	水位水量増減	●	●	○	○		×	○	◎		×	○	
	木竹伐採	●	●	○	○			○	◎			○	
汚染	火入れ焚き火	●	●					○	◎				
	汚廃水排出			○	○			○	◎	◎			
	廃棄物投棄等	●	●										
生物相攪乱	特定汚染物質散布												
	指定種捕獲採取等	●	●		○	○		○	◎	◎			
	その他捕獲採取等	●	●						◎				
	指定種移入植栽等												
	家畜等放牧	●	●										
環境攪乱	木竹植栽等	●	●										
	その他植物植栽等	●	●										
	車馬等乗り入れ	●	●	○	○			△	◎				
	立ち入り		●										
	不適切観察												

●：原則禁止 ◎：原則禁止に準ずる ○：要許可 △：指定地域のみ要許可 ×：要届出

る。

この研究の第一報(由井ら, 1999)に引き続き、より具体的にこの地域の制度的な保護区としての設定について検討してみた。表1および表2のように、各種の地域指定の内容を比較してみると、やはり都道府県自然環境保全地域もしくは都道府県立自然公園が、この地域に適合するものとなる。この両者は、国レベルのものに比し、比較的緩やかな規制であることに不安をもつかも知れないが、適切な管理を行えば保護区としての役割は十分に果たせるはずであり、さらに管理や利用の面で地元の要望や地域の特性を踏まえたものとするのが容易であるというメリットもあるのである。

具体的に検討してみると、第一報では県自然環境保全地域が適合性が大きいとしたが、この報告では、もう一つの方法である県立自然公園について再考してみよう。前報では花巻温泉郷県立公園の飛び地の可能性にも触れたが、性格的には適合しないとしてやや消極的な判断をした。第一報では明示しなかったが、自然公園には比較的大面積の風景地としての一体性が求められ、計画論的には「飛び地」は異例に属することもその理由の一つであった。

しかしながらその後の検討の結果、花巻温泉郷県立公園の「飛び地」としての区域拡張の主張の妥当性が、二つの点で高まるものと判断するに至った。

その一つは“賢治たちのイギリス海岸”に限らず飛び地を拡大することである。賢治ゆかりの胡四王山一帯と、西の北上川沿岸を釜石線鉄橋付近から獅子鼻付近まで南北に広く取り、さらに花巻城址や鳥谷崎神社、さらに羅須地人協会跡などを含むものとするのである。

また既存の花巻温泉郷県立公園の性格を補って、これまでの公園地域内には、賢治の設計した日時計花壇をはじめ賢治の指導のもとに設計された花壇などがあること、短編「台川」があること、などにより、むしろ賢治と関わる文学的風土としての価値も見いだせば、性格的に“賢治たちのイギリス海岸”と共通するものがあるといえよう。な

お台川は瀬川に合流し、“賢治たちのイギリス海岸”とは自然的にも結ばれている。

これにより拡張後の花巻温泉郷県立公園は、“賢治”というキーワードによって性格上の一体性を確保するとともに、豊沢川、台川沿いの温泉集落を包含する自然公園という、ややアナクロニカルな従来の位置付けに文学的価値を付与することになる。

しかしながら、文学的風土という点のみで県立公園としようとするわけではない。賢治の自然環境への思いを具現化する環境学習のための場としての自然公園とすることを目的とする。そのため中心となる地区が“賢治たちのイギリス海岸”付近で、これに野外教室としての役割を持たせることを考えたい。

指定後長い時間が経ち、周囲の自然条件や社会条件が大きく変化した自然公園については、時代の要請に応えるべく公園の区域や計画内容の抜本の見直し(いわゆる「再検討」)が環境庁によって国立・国定公園について進められており、都道府県立自然公園についても同様の作業の推進が各都道府県に求められている。しかしながら岩手県においては7つある県立自然公園のうち、久慈平庭および外山早坂高原の2公園がそれぞれ昭和46年、50年に区域変更を行ったのみで、再検討作業が全く進捗していない。これは現時点で青森、福島両県が全公園について再検討が完了し、宮城が8公園中5公園、山形が6公園中4公園、秋田が7公園中3公園完了という東北他県の進捗状況と比較すると著しく立ち遅れているといわざるを得ない。

表3は、北海道・東北の一道六県の保護区(国立公園・国定公園・道県立自然公園・自然環境保全地域等・道県自然環境保全地域)指定状況を示したものである。岩手県地域はその中で指定面積が実面積・占有率とも最下位で、しかも他の道県に比し一桁小さい。県土の面積が岩手県の半分にも満たない宮城県が、保護区の指定面積においては実面積で岩手県の2.3倍、占有率に至っては岩手県の5倍にもなっているのである。

表3. 北海道・東北地方における自然公園及び自然環境保全地域の指定状況 (1998. 3. 31現在)

都道府県	県土面積 (ha)	国立公園		国定公園		都道県立自然公園			
		箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	平均(ha)	占有率(%)
北海道	8,345,165	6	503,263	5	212,359	12	145,410	12,118	1.74
青森	923,380	1	40,600	2	44,694	8	29,237	3,655	3.17
岩手	1,527,778	2	29,231	2	20,038	7	22,557	3,222	1.48
宮城	686,110	1	980	3	64,175	8	106,044	13,256	15.46
秋田	1,072,663	1	26,796	3	47,197	7	49,176	7,025	4.58
山形	739,433	1	71,067	3	41,241	6	42,440	7,073	5.74
福島	1,378,248	2	79,379	1	33,665	11	55,336	5,031	4.01
小計	14,672,777	14	751,316	19	463,369	59	450,200	7,631	3.07
全国	37,783,689	28	2,047,265	55	1,343,502	304	1,945,165	6,399	5.15
都道府県	県土面積 (ha)	自然環境保全地域等		県自然環境保全地域		計			
		箇所数	面積(ha)	箇所数	面積(ha)	面積(ha)		占有率(%)	
北海道	8,345,165	7	3,604	7	3,690	868,326		10.41	
青森	923,380	1	9,707	9	1,230	125,468		13.59	
岩手	1,527,778	2	2,821	13	2,195	76,842		5.03	
宮城	686,110	0	0	14	7,815	179,014		26.09	
秋田	1,072,663	1	4,336	14	686	128,191		11.95	
山形	739,433	0	0	5	5,106	159,854		21.62	
福島	1,378,248	0	0	47	4,867	173,247		12.57	
小計	14,672,777	11	20,468	109	25,589	1,710,942		11.66	
全国	37,783,689	15	27,224	519	73,609	5,436,765		14.39	

このような岩手県と北海道・東北の諸道県との格差は、主に国定公園と道県立自然公園の面積によるもので、いずれも面積・占有率において岩手県は最低である。すなわち岩手県が管理する自然公園の面積が相対的のみならず、絶対的にも狭いのである。もちろん自然公園の指定要件には、その地域の自然景観の質的な高さが主要な要件の一つとして求められるが、他道県と比し大きな遜色があるとは筆者らには思えない。これらのことから、当面は県立自然公園の指定地域の再検討を行い、その面積の拡大の可能性を検討すべきではないだろうか。この県立自然公園花巻温泉郷の拡大も、その一環として検討が望まれる。

V 野外教室としての“賢治たちのイギリス海岸”

1. 賢治作品にみるエコトープ

“賢治たちのイギリス海岸”において、筆者らが注目したのは、短編「イギリス海岸」に描かれた景観はすでにほとんど現在は日常的にはみられないことであり、むしろ長編「銀河鉄道の夜」に描かれた幻想的な世界が、この地域の環境整備に

取り込まれるべきであることを認識したのである。

宮沢賢治は「銀河鉄道の夜」のなかで、“イギリス海岸”の銀河でのすがたとしての“プリオン海岸”を“白鳥停車場”の近くに設定し、その付近で白鳥、鶴、雁など（以下、この部分では動植物名は原則として宮沢賢治による表記を用いる）を捕る商売の“鳥捕り”を登場させ、鷺を捕る場面を書くが、その鷺も鳥捕りも幻のように消えるものであり、捕ったという鳥は単なるお菓子にすぎないという不思議な話を書いている。その寓意するものについては、さまざまに解釈できるが、主人公のジョバンニたちが鳥捕りが消えたあとで交わす会話などから、生きものを捕る人間の哀しい業（ごう）と、そのような人間も幻のような存在であることへの痛ましさを描いたものとするのが妥当であろう。賢治はこの作品にさらにかささぎや孔雀、わたり鳥たちなどをも登場させており、すすき、りんどう、かわらははこぐさ（カワラハハコ）、楊（ヤナギ）などの植物のみられる河岸も描いている。このような植生の中に、野鳥のサンクチュアリーを設け、エコトープをかたちづくること、宮沢賢治の自然への想いに通ずるものとなろう。

2. 野外教室「賢治たちのイギリス海岸」の設定

野外教室「賢治たちのイギリス海岸」をどのような内容で設定すべきであろうか。そのカリキュラムについては、今後、地元の住民や研究者、教育関係者によって、検討されるべきものではあるが、現時点で考えられるポイントを挙げてみよう。

- a. 河川の地形には人類による改変が大きいこと、ならびにそのことの利害得失を学ばせる。
- b. 北上川という日本有数の大河流域であり、開発の進んだ低地でありながら、他の大河沿岸の低地に比べるとかなりよく生態系が保全され、豊かな動植物相が維持されていることを学ばせる。
- c. 宮沢賢治が「銀河鉄道の夜」などで描いた動植物などを、この地域で観察することにより、豊かな自然が彼の文学的風土としていかに重要なものであったかを学ばせる。
- d. 人里、とりわけ都市にごく近接した地域の自然環境を守ることの意義を学ばせる。

以上のことは、賢治ファンが期待するような短編「イギリス海岸」そのままの景観等を復元するような地域整備とは異なるかも知れないが、すでに賢治たちが「イギリス海岸」と呼んだ景観は水面下にあり、今後、進めるべき方向は童話「銀河鉄道の夜」の「プリオシン海岸」のイメージによる地域整備であろう。ただし、この「プリオシン海岸」は幻想的で現実感に乏しいことと、近年の研究では、むしろ「プライストシーン河岸（湖岸?）」と称すべき場であることから、敢えて「プリオシン海岸」の名はここでは用いないこととする。

a～dを学ばせる場に対して、本稿では「野外教室」の名を与えたが、類似の性格を持つ場、施設、活動に対して近年は「エコ・ミュージアム」、「自然教室」、「自然学校」など様々な名称が用いられている。これらのうち、用語として明確な定義のあるものは「エコ・ミュージアム」のみで、

それはRiviere (1975)によれば「行政と地域住民が一体となって、地域の生活、自然、社会環境の発達過程を歴史的に探求し、自然および文化遺産を地域において保存・育成・展示することを通し、地域振興に寄与するもの」とされている。

本稿でいう「野外教室」はまさにこのエコ・ミュージアムの概念とほぼ一致するが、それを避けてこの語を選んだのは、わが国では「エコ・ミュージアム」の名を冠して様々な主体により多様な形で事業・活動が展開されており、結果として若干の混乱が見られること、そしてなにより教師賢治が彼の教え子と学び遊んだ「イギリス海岸」への想いを込めたかったためである。内容的には一種の野外ワークショップが主となるであろう。

3. 野外教室の基本的考え方

宮沢賢治の想いを基底に据えて、さらこの野外教室における学習の基本的な考え方を示してみよう。

川は都市域にわずかに残った、野生の動植物と接触できる貴重な場所の一つである。河畔林は緑の回廊として、動物たちの川に沿った移動を助け、同時に生育地ともなっている。本来、河道は大きく頻繁に変動し、造りだされたさまざまな環境モザイクは、多様な種の棲み場を提供する。過去、人の営為の多くは河道の曲がりやをなだらかにし、分岐を減らし、時には直線に近いものとし、特に近代には高水位工法によって固い護岸を築造し、洪水を防ごうとした。「賢治たちのイギリス海岸」が、実は近世における人為的な河道の付け替えによって生まれたものであることを賢治はおそらく知っていたであろう。この人工の産物である「イギリス海岸」において、彼が太古の生き物たちの痕跡を発見したのは実に皮肉なことではあるが、人為的な切り通しや崖が貴重な化石を産出することは珍しいことではない。問題は自然か人為かではなく、賢治のまなざしが、その当時の水泳場の川面から遥かな過去へと向けられ、さらには未来へと貫くものを見通していた姿勢こそを、現代の「野外教室」は踏襲すべきである。

現実の“賢治たちのイギリス海岸”において見られるものは、ただの水の流れに過ぎない。賢治の見ていた泥岩の岩盤さえ今は見る事ができない。しかし、我々は賢治の作品を手掛かりにして、岩盤の泥岩が白くまぶしかった時代、動輪船が、また白帆の船が行き来した舟運の時代、河道が大きく蛇行して洪水が花巻城下を襲った時代、そして遙かな過去、オオバタクルミが茂り、野牛の類いの哺乳類が闊歩していた時代などを想像することができる。

大切なことは、以下のことであろう。

- この想像力を妨げるような景観要素をなるべく排除すること：場所や解説を記した標識類は、極力自然景観に溶け込むような材質・大きさ・個数・設置場所にするよう配慮されなければならない。
- 想像力を助けるような景観要素は保全すること：人工的に付け替えられた河道とはいえ、すでに長い時間の経過によって、河岸にはヤナギ科やオニグルミを中心とした河畔林が成立しており、特に猿ヶ石川合流点付近では鳥相が豊かである。人の生活する場の間近にありながら多くの種類の動植物を有する「里川」的な景観は維持していきたい。
- 現場での解説や指導は可能なかぎり市民レベル、特に付近に住まう人々によってなされること：地域の歴史と環境を住民個人の生活史と絡めながら語り得るのはこの人々しかない。
- 環境教育の場としての河原を重視すること：河原は川を中心とした自然と人間との接触の諸相がよく観察できる所である。人間が自然に対して為してきたことも、自然がもっている潜在力も、双方とも見える場なのである。
- ただ興味を起こさせ、知識を与えるだけにとどまらず、自然・環境に対する態度や問題解決能力を身につけ、環境を総合的に測定・評価できること、さらに問題解決への参加意識を高めること、を教育の目標とすること：このことについては赤井・小川（1996）論説を参照された

い。

このような「野外教室」の場として、みずから自然環境教育の実践と文学的営為とを行った宮沢賢治が実際に歩いた“賢治たちのイギリス海岸”を、最初に選ぶことには大きな必然性と意味がある。

大石（1995）も記しているように、宮沢賢治は第三紀層としながらも、年代としてはむしろ第四紀更新統のように書いている。すなわち短編「イギリス海岸」には「今から五六十万年或は百万年を数えるかも知れません」とか「百万年昔の海の渚」などと書き、「銀河鉄道の夜」では「ざっと百二十万年ぐらゐ前のくるみだよ」と大学士に語らせている。

これらのことを、第三紀層とした宮沢賢治の知識の古さを指摘したり、たまたま百二十万年としたことを先見性がある、としたりするのはいずれも妥当ではないであろう。

宮沢賢治は「銀河鉄道の夜」の“プリオシン海岸”で大学士に「ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか…」などと言わせているし、「銀河鉄道の夜」の異稿に登場するブルカニロ博士には、過去のある時代について書かれていることを本当だとする証拠について「…さがすと証拠もぞくぞくと出てゐる。けれどもそれが少しどうかたと斯う考へだしてごらん…」と、それに疑問を持つべきことを主人公のジョバンニに勧めている。

科学者の間にはさまざまな見解があり、定説も鵜呑みにせず、より真理と思われるものを求めてゆく心が、科学を進歩させることを、宮沢賢治は認識していたらしい。その意味では、このいわゆる“イギリス海岸”ないし“プリオシン海岸”は、科学というものにあっては固定化した知識よりも、柔軟な見方、考え方が重要なことを学ぶ「野外教室」であるといつてよい。

一般に日本の文学的想像力は、自然に対し皮相

的な花鳥風月に流れるきらいがあった。しかしながら、奇跡ともいべき存在である宮沢賢治によって、自然科学の素養と文学とが希有の融合をみることとなった。と、同時に賢治の作り出したイメージだけにとらわれ過ぎる危険性も生じたことは心せねばならない。賢治とは異なった眼でみることを、ほかならぬ賢治自身も望んでいたであろうことは、上記の大学士やブルカニロ博士に語らせた言葉で知ることができる。

この「野外教室」の現場に臨んだ人たち誰でもが自分なりの自然観、歴史観を持ち得るような豊かな発想の場とする配慮が必要である。この“賢治たちのイギリス海岸”を起点として、さらに北上川流域全体の自然環境に目を向け、賢治さえも見いだし得なかった世界を、現代の生態学や環境科学の視点からとらえなおす場とすることを望みたい。

おわりに

この報告では“賢治たちのイギリス海岸”付近のこれからのありかたを、宮沢賢治の視点と関わらせて検討し、この地域に適合する保護区としては岩手県立自然公園花巻温泉郷の飛び地のかたちが妥当であろうという提案を行った。

建設省岩手工事事務所はこの付近を「イギリス海岸周辺水辺空間整備事業」として河川環境管理計画に基づく整備を進めつつあり、北上川歴史回廊の一つとしての「川の交流拠点」の検討整備を行いつつあり、花巻市もまた、これとタイアップして、いわゆる“イギリス海岸”付近の地域整備計画の検討を進め、両者は「花巻市水辺プラザ懇談会」などにより市民等の意見を徴することなどを行っている。

この報告は、それら河川管理者や自治体などの公的な調査検討とは別個に、学術研究の立場から岩手県立大学総合政策学部環境政策講座が行った調査に基づくものである。河川を管理し、地域整備を進める立場からの議論は、もちろんこの問題の中心的な当事者からのものとして重要であることは論をまたないが、この種の問題に対しては、

多様な立場、広域的な視野からの論議や参画が必要であると考え、前記の機関や民間の団体による地域整備計画等とは独立的に環境科学に関わるものの立場からの調査研究、検討を行ったものである。この成果が“賢治たちのイギリス海岸”の未来像を描くさまざまな論議に一石を投じて、何らかの示唆をもたらし、よりよい地域整備を考える一助となることを期待するものである。

生態・景観を活かした環境管理・地域整備のありかたを探る共同研究の第一報および第二報として、この地域を取り上げた理由の一つは、上記のような整備計画立案の進行という時点にあって可及的速やかに環境科学の立場からの提言を要することのためであるが、さらには、この対象地域が、建学の精神に宮沢賢治のそれを重ね合わせて開学した岩手県立大学の環境政策講座の共同研究の最初のフィールドに適わしいものと考えたからである。

本稿ではナチュラルリスト賢治、教師賢治、農民賢治、という彼のさまざまな像の持つ、想い、願い、ときには挫折感や憧れなどなどがこめられた場としてのいわゆる“イギリス海岸”ないしは“プリオン海岸”の、その文学的風土を、さらに環境学習の場として保全し整備していく方法を探った。地域それぞれの特性をふまえた環境管理・地域整備が必要なことはいうまでもないが、本論文は宮沢賢治という個性あふれる文学者の描いた、いわゆる“イギリス海岸”の場が、実は環境学習の先駆者ともいべき賢治の科学的な発想の原点の一つ“プリオン海岸”であることを活かし、真にその場に適合したありかたの一つのアイディアとして、自然公園を活かした野外教室という形で示したものである。

謝辞 調査に際してお世話になった方々、特に花巻市や「北上川とイギリス海岸を考える協議会」の浅野貫司氏らへの謝意を表する次第である。なお、本研究には岩手県学術教育振興財団の助成研究「岩手“くらし・創造”に向けた総合政策に関する基礎・調査研究」の研究費の一部を用いた。

また、環境政策講座の山田晴義・信夫隆司・佐野嘉彦の諸氏には共同研究者として種々のご協力をいただいたことを付記する。

注

- 1) 小沢 (1961) が歌詞の “Tertiary the younger…” を「第三紀初期層…」と訳しているのは誤りで、第三紀上部層、あるいは1922年1月刊行の『巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書』の第一章に書いたように第三紀新層とすべきものである。つまり初期の古いものではなく、末期の若い、新しいものなのである。なお、『巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書』のこの部分は宮沢賢治が執筆したものと推定されている。
- 2) 女学校などの臨海学校が石巻でもたれていることへの、いわば代用的なものとして、“賢治たちのイギリス海岸”での水泳が行われていたという意味のことが短編「イギリス海岸」に書かれており、あながちの外れの推論ではないかも知れない。賢治たちが“痩せ我慢”的に、あるいは半ば自虐的に、「石巻のような日本の海岸などで泳ぐのではない、イギリスの海岸で我々は泳ぐのだ」と言っていたのではあるまいか。岩手県の内陸部の学校が石巻で臨海学校を開くのは、その後、北上川の船を用いず鉄道時代になっても、断続的ながら長く続けられており、例えば筆者の一人米地は、1947年、現一関市の山目中学校の生徒として石巻での臨海学校に参加した体験をもつ。
- 3) それに対して同じ北上中流部の低地であっても黒沢尻以南では、北上川は緩やかに流れ、分流してアナストモーゼング河道をなしていたりしていた(米地, 1991)。

文献

- 赤井裕・小川かほる (1996) : 水辺の環境教育. 身近な水環境研究会編, 都市の中に生きた水辺を, 239-253. 信山社.
- 赤田秀子 (1993) : そのネーミングの魅力. 江古田文学, 12-2 (特集宮沢賢治), 112-114. 岩手工事事務所 (1977) : 北上川 第六輯. 岩手工事事務所.
- 大石雅之 (1995) : 胆沢川河床の足跡化石の概要—宮沢賢治の「イギリス海岸」に関連して—. 第42回ペドロジスト野外見学会資料, 92-100.

- 大石雅之・吉田裕生・金光男 (1998) : 北上低地帯, 和賀川・夏油川流域の鮮新・更新統. 岩手県立博物館調査報告書, 14. 5-20.
- 小沢俊郎 (1961) : アルピヨンの夢と修羅の渚. 四次元. 再録: 小沢俊郎編 (1975), 賢治 地理, 8-25. 学芸書林.
- 建設省岩手工事事務所 (1977) : 北上川第六輯
- 佐藤成 (1984) : 宮沢賢治—地人への道—. 川嶋印刷.
- 佐藤成 (1986) : 宮沢賢治の五十二箇月—教師としての賢治像—. 川嶋印刷.
- 白藤慈秀 (1972) : こぼれ話 宮沢賢治. 杜陵書院.
- 早坂一郎 (1926) : 岩手県花巻町産胡桃に就いて. 地学雑誌, 38. 55-65.
- 早坂一郎 (1970) : 角礫岩のころ. 川島書店.
- 早坂一郎 (1975) : 宮沢賢治との出会い. 小沢俊郎編, 賢治地理, 98-105. 学芸書林.
- Miki, S. (1955) : Nut remains of Juglandaceae in Japan. J. Inst. Polytech. Osaka City Univ., Ser. D, 6. 131-144.
- 宮城一男 (1975) : 農民の地学者・宮沢賢治. 築地書館.
- 宮城一男 (1980) : 宮沢賢治の生涯 石と土への夢. 筑摩書房.
- 宮城一男 (1983) : 宮沢賢治と自然 作品鑑賞. 玉川大学出版部.
- 山野井徹・田宮良一・板垣宏一 (1997) : 庄内の観音寺層からクルミ化石(絶滅種)の発見. 山形応用地質, 17. 58-59.
- 由井正敏・平塚明・幸丸政明・豊島正幸・山田晴義・米地文夫・信夫隆司・佐野嘉彦 (1999) : 北上川中流部 “イギリス海岸” 付近の生態・景観と地域整備—岩手県域の地域環境計画に関する研究 (第一報)—. 総合政策, 1. 337-351.
- Riviere, G. H. (1975) : Role of Museums of Art and of Human and Social Science. MUSEUM, 25. 1/2. 1-12.
- 米地文夫 (1991) : 北上中流部河谷の川の形と谷の形—地形と歴史地理の接点を探る—. いわて地域科学, 5. 2~8.
- 米地文夫 (1996) : 宮沢賢治の創作地名「イーハトヴ」の由来と変化に関する地理学的考察. 岩手大学教育学部年報, 55-2. 45-64.
- 米地文夫 (1997) : 賢治は海が嫌いだった?. 茨海通信, 3. 2-7.
- 米地文夫 (1999) : いぎりす橋と “賢治たちのイギリス海岸”. 茨海通信, 15. (編集中).

(1999年12月6日受理)

The Planning of Field Workshop Inspired by Kenjis'
“Igirisu Kaigan (The English Coast)” :
Research on the Local Environmental
Plan of the Iwate-Ken Region (The Second Report)

Fumio YONECHI, Akira HIRATSUKA, Masatoshi YUI,
Masaaki KOUMARU, Masayuki TOYOSHIMA

Abstract This is a reading and interpretation of the works of Kenji Miyazawa as a natural history of the region, and a report for a regional environmental planning based on it. We also considered the cultural background in relation to local environmental planning of so-called “Igirisu Kaigan (The English Coast)”. The area should be improved to be a field study or an environmental study area. It will be appropriate to settle up the area as an enlarged separate part of the “Iwate Prefectural Natural Park : Hanamaki Hot-Spring Resort Park”. A plan of “the field workshop” was proposed to utilize this zone.

Key Words Kenji Miyazawa, Igirisu Kaigan (the English Coast), local environmental plan, prefectural natural park, field workshop